

しまいます。持つて行かないとしても、その後大宰府は廃止になります。七四五（天平一七）年まで廃止になっているわけです。廃止された後、そのときに物が残っているとすれば、ごくわずかなものです。同時にほとんど管理をする人間はいません。それが八世紀の第2四半期、第3四半期に土器の出ない理由です。広嗣の乱が土器の出ない理由を示していると考えられるわけです。

本日お話ししたことは、鞠智城というのは七世紀の中葉に、東北の越国に造られた城柵に対応するように、南九州の熊襲・隼人に対する根拠地として建設された西日本の最初の城柵です。七世紀の後半に、新羅に対する対応のために組み込まれるが、新羅の対応が一段落すると、再び南九州の経営のための根拠地として整備されました。それが文武天皇二年です。その後大伴旅人がいたかどうか分かりませんが、大宰の帥だったころに、南に対する拠点としての機能を果たしました。しかし七四〇年の藤原広嗣の乱によって、広嗣が逆に隼人を武装するために鞠智城の武器や食糧を使用しました。その後がらんどになった鞠智城は、それまでの南に対する拠点としての性格を失ってしまいました。八世紀の後半になると、鞠智城は肥後の国司の所管になり、同時に文字も「菊池城」に変わり、兵庫や不動倉などの設置場所として使われたのだらうと思われます。

八世紀後半以降の鞠智城については、後ほど加藤さんのほうから詳しく話があると思いますので、そちらに譲りたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

## 講演①

### 古代山城の建物

― 鞠智城と大野城・基肆城 ―

#### 講演者紹介

赤司 善彦 （あかし よしひこ）

明治大学文学部卒業。福岡県教育委員会、九州歴史資料館、九州国立博物館を経て、現在、福岡県教育庁総務部文化財保護課長。大宰府政庁跡の発掘調査に長年携わる。専門は日本考古学。

# 講演① 「古代山城の建物 - 鞠智城と大野城・基肆城 -」

福岡県教育庁総務部文化財保護課長 赤司善彦

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました福岡県教育庁文化財保護課の赤司と申します。よろしくお願いします。

この写真は、鞠智城の公園の風景です(写真31)。鞠智城の中からは七〇棟ほどの建物が見つかっています。



七〇棟の建物というのは大変多いわけです。そのうちの幾つかがこのように現地で復元をされています。古代の山城は砦ですから、当然にして武器を貯えるところ、あるいは兵舎があったり、兵糧を納めたところなど、そういう倉があることは当然なのですが、それにしても建物の数が多すぎます。このことは鞠智城だけではなくて、大野城、基肆城という、同じ古代山城にも見られる現象です。どうしてこれほど建物が多いのか。このなぞを解くことが、古代山城の役割、あるいは本日のテーマである律令国家、大げさではあります。国家の成り立ちというものを考えるヒントになるのではないかと考えています。

はじめに

これは古代山城の分布図です(図6)。ご存じのように朝鮮半島、九州の北部、さらには瀬戸内、最も東の高安城という、奈良と大阪の境のところの山が今想定をされていますが、そういうところに分布しています。九州の北部では大宰府を拠点にかたまっています。それから瀬戸内沿い、そして最後に都のそばというように分布しているのがお分かりになると思います。黒い四角が朝鮮式山城といわれている、要するに文献史料に名前が出てくるお城です。金田城、大野城、基肆城、鞠智城、屋嶋城、高安城です。23、27は、名前



写真31 鞠智城跡風景

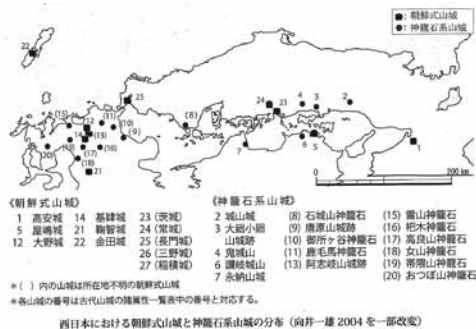


図6 古代山城分布図

は出てきますがどこなのかよく分からないものです。黒丸は神籠石と呼んでいます。文献には名前が出てこないというものです。われわれ古代山城の研究をしている人間にとっては、あまり名称は構わずに同じように研究はするわけですが、便宜上、朝鮮式山城、神籠石というように分けて考えます。

山城名	時 期			
	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
大野城				
基肄城				
金田城				
屋嶋城				
鞠智城				
高安城				

663年 白村江敗戦  
664年 防人・烽火を築城  
665年 大野城・基肄城築城  
667年 高安城・屋嶋城・金田城築城

701年 高安城を廃す  
712年 茨城・常城を停廃。

698年 大野・基肄・鞠智の三城。高安城を修理  
699年 高安城・三野・稻積城を修理

図7 出土土器と建物からみた朝鮮式山城の存続時期

という、この頃が修理をするような、あるいは造り替えるような、プランを一度変更するような時期が七世紀の末ごろの話です。

ところが大宝律令が制定された後、ただちに高安城はやめるといい、茨城・常城もやめるといように、

この図はこれまでの調査の成果で、出土土器から見た朝鮮式山城が、どの程度存続をしていたのかを図に表したものです(図7)。下に年表のおおよそのできごとを書いていきます。最初に城を築くということが出てくるのは六六三年の白村江の敗戦後です。友好国の百済を救うために自国の軍隊を出すという、どこかで聞いたような、まさに集団的自衛権が初めて行使されたわけです。負けた後の六六四年に、防人と烽火の通信の制度を整え、筑紫、今の大宰府の辺りに水城を築き、そして大野城、基肄城をさらに築きます。六六七年には、高安城、屋嶋城、金田城を築きます。順番に築くわけで、この頃が築城時期です。その後七世紀の後半以降、末になると、六九八年に鞠智城の名前が初めて出てきます。大野城、基肄城、鞠智城を修理、繕治する

八世紀になると、やめてしまうというものが出てきます。ところが高安城もそうなのですが、実際に発掘調査をすると、高安城などは七二〇年代から七四〇年代の平城京で出土する土器と同じものが出てきますので、だいたいの時期が押さえられているわけです。そうすると記録上は廃絶に向かっているはずですが、なぜか一番上の大野城、基肄城も今のところ土器と瓦から見ると、八世紀の終わりまで、大野城は九世紀の後半まで続きます。先ほどご紹介がありましたように、鞠智城も八世紀の中頃から後半にかけて土器の上で空白期があるのですが、その後も続いています。これはあくまでも土器がなくなっているだけで、遺跡・遺構そのもの、土地利用がないかどうかというのはよく分かりませんが、少し空白期があるのは間違いありません。

せん。

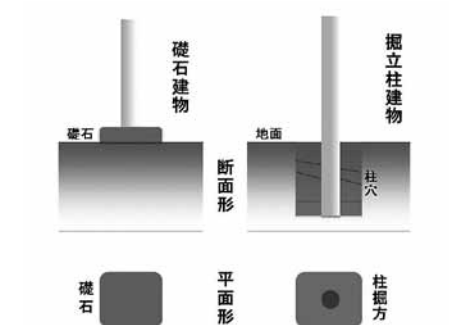


図8 掘立柱建物と礎石建物

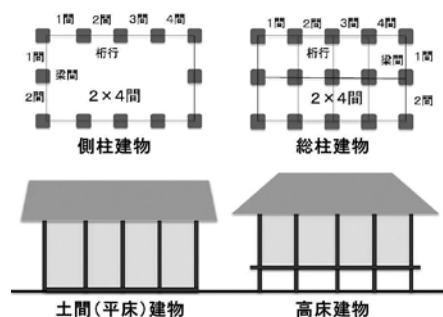


図9 側柱建物と総柱建物

さて、まずは、掘立柱と礎石建物がどういうものかという、皆さんにおさらいのようなことを話します(図8)。右側が掘立柱の建物です。これは地面に直接穴を掘って、そこに柱を建て、周りを突き固めて、上で屋根を支えるようになるわけです。これを掘立柱の建物といいます。

左側は礎石建物、石を置いて、これを礎石としてその上に柱を建てます。そのときは下に地業という、地面のほうも硬くたたきしめたりするわけです。要は重量物が載ることによって、掘立柱では沈んでしまいますので、重量に耐えられるように礎石を置くということです。もちろん見てくれも全然違いますので、どちらかという建物豪華になります。瓦があり、朱塗り、連子は緑色という、今でいう神社の建物を想像していただくと思います。そのような建物で瓦葺になるところが、一般的にいわれているものです。これを上面から見ますと、発掘調査をしたときには、こういう柱の穴を掘りましたので、周りに四角い穴があるわけですが、その真ん中に柱の痕跡が出てくるというものです。礎石の場合はそのまま残っているわけです。柱の痕跡はありません。日本の建物は紙と木でできていますので、上屋はほとんどなく、このような土台しか残っていないわけです。

これも分かっていたかなければ、本日の私の話はまったく分からなくなってしまうので、よく聞いてください。建物には、今言いました柱の跡、礎石でも掘立の場合でも構わないのですが、建物にはこのように、床の周りに柱を立てる側柱がわばしらの建物というものと、床のところにも柱があるものがあり、これを総柱の建物といいます。側柱と総柱の二種類です。これがどう違うかといいますと、簡単に図にしたものがこれです（図9）。側柱の床は土間あるいは平床の建物です。一方、総柱という、床にも柱があるもの、床束ゆかづかといいますが、床束が周りの柱と同じ規模の場合には、床を支える柱と考えられます。これは高床の建物で、床が地面から上がっているのです。これは一般的には、倉庫に使われていました。湿気抜き、あるいは動物な

どが近寄ってこないようにということ、床を地面より高く上げる建物で高床建物といえます。ということを入れているわけです。

次に建物の規模を数えるときに、われわれは柱と柱の間を一間けんといっています。通常一八〇センチのことを一間といいますが、古代の場合、考古学では、一間、二間、三間、四間というのは、柱と柱の間の数のことです。梁はりと桁けたとありますが、梁も一間、二間です。この建物の場合に数えると、二間×四間の建物になります。ですから、五間×一〇間となると、間が五つですから、柱の穴が六つあることになります。ということは、もっと規模の大きな建物になるものであるということを入れているわけです。



写真32 東大寺正倉院

本日は倉庫の話です。これは東大寺の正倉院です（写真32上）。これは今勉強していただきましたので、建物の規模でいくと何間でしょう。数えてみると、一間、二間、三間、それから長いほうが、一間、二間、三間、四間、五間、六間、七間、八間、九間、ですから三間×九間の建物ということになるわけです。これも頭に入れておいてください。こういう立派な建物です。この写真は、二年前に

用事があつて正倉院事務所を訪ねたときに、ちょうど修理をされていて拝見したときのものです(写真32下)。そのときに驚いたことは、正倉院が建つたのは奈良時代で、それから一、〇〇〇年以上保っています。

先ほどの写真を見ても、とても規模が大きく神々しいばかりです。倉というものは単なる建物ではないのです。ある意味を持つような象徴的な建物であるということを実感しました。私が一番言いたいことは、建物は長くもつということです。考古学ではこういう建物、これは礎石ですが、掘立柱の建物は二五年で終わるといいますが、そのようなことはありません。メンテナンスさえすれば長くもちます。ただしいろいろな条件で、例えば台風や火災があつたりすると建て替えられます。あるいは何か違う意図といいますが、大きな変更が加えられるときには、当然建て替えはあると思いますが、それ以外は、建物はだいたいこのように残るものだというようにお考え下さい。

## 一・大野城・基肆城の建物の動向

### (一) 大野城の建物

これから実際に大野城の状況を見ていきたいと思います。大野城は太宰府市あるいは大野城市、宇美町という二つの市と一つの町に接しています。これは空から見た大野城です(写真33)。白い線は土塁が走っているところです。空から見たら、全て木におおわれています。実際の地形を見ますと、図10のようになっています。これは何かというと、大野城は二本の谷筋があり、真ん中に平原のような台地がありますが、よく



写真33 大野城跡空中写真

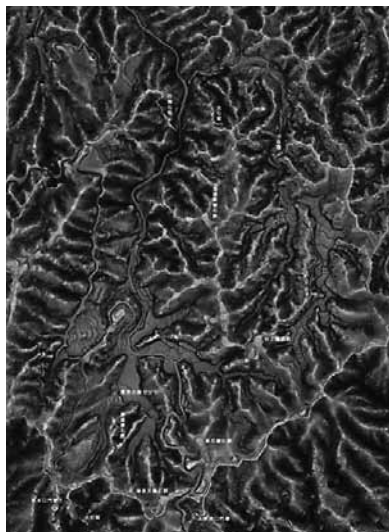


図10 大野城跡レーザー計測図

見ると尾根がやせているのです。平坦面がないのです。お城というと、中は平坦だろうと思われがちですが、そうではなくて古代山城の多くはこのように周囲が急峻な地形というか、変化に富んだ地形のところに築かれているのが一つの特徴です。

次は、レーザー計測を処理したのですが、傾斜があるところは少し黒くなっています。標高が高いところには白色の色を付けています(図11)。これで見ると分かるように、大きな城内、周囲が六キロ以上あり、歩くだけで半日以上かかりますが、その中に分散的に建物群が配置されているというのが大野城のあり方です。

これを実際に、幾つかの地点を見ますと、先ほど皆さんには学んでいただきましたのでお分かりになった

物の変遷を知る手がかりになっている場所です。何回も建て直していますので、古い建物から新しい建物まで、数回建て直されていますから、それによって建物の構造がどう変化していくかということがこの場所で分かるわけです。

この写真は、増長天という地区です（写真34）。尾根の頂部にまっすぐ倉が並んでいる様子が見えます。すぐ隣の尾花という地区ですが、これも見てください。こんなやせ尾根のところにとうか、こういう場所に倉を造営しているということです（写真35）。これは八ッ波という地区ですが、尾根の上だけではなく、丘陵の緩斜面があれば一番いい場所なのですが、そこを階段状に造成をして、そこにきちんと整然と並べるといことが分かっていきます（写真36）。



写真34 大野城跡・増長天地区



写真35 大野城跡・尾花地区



写真36 大野城跡・八ッ波地区

と思いますが、これが倉庫群の分布を示した図面です（図12）。全てが総柱であることが分かります。これは尾花というところですが、非常に整然と配置をされています（図12左下）。これは、主城原というところで、この場所は大変重要だったようです。建て直すときに違うところで建てるのではなく、同じ場所に何度も建てています（図12右上・資料編22頁図2）。この場所が大野城における建

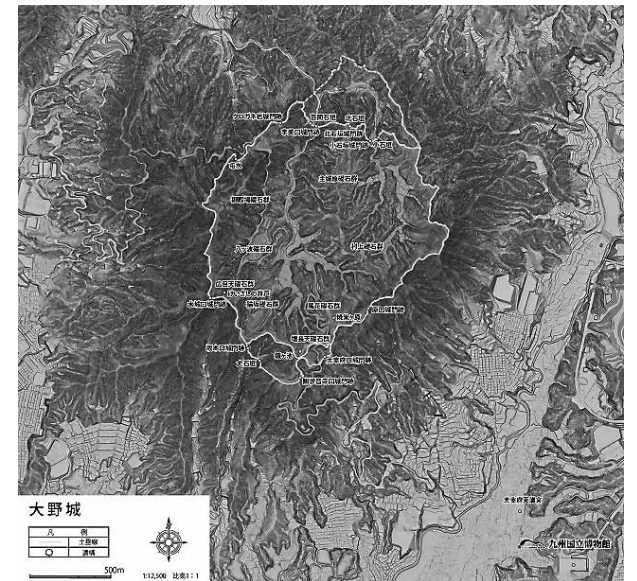


図11 大野城跡レーザー計測図（色替え）

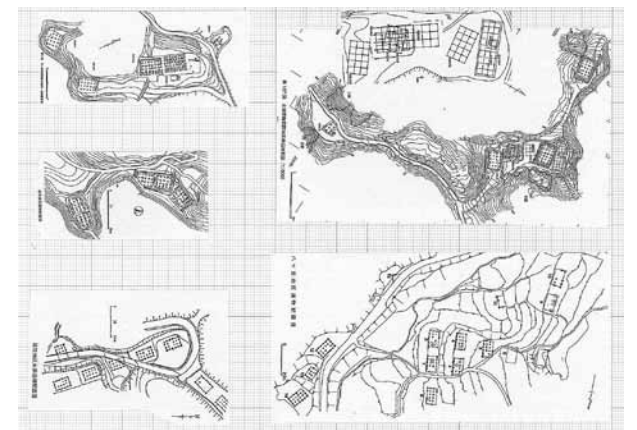


図12 大野城跡・倉庫群配置図

掘立柱建物	
側柱建物（掘・側）	1×1(1)・3×7(2)……………主城原地区
総柱建物（掘・倉）	3×3(1)・3×9(1)………主城原地区・猫坂地区
礎石建物	
総柱建物 基壇付（礎・倉・基）	3×5(1)・3×4(1)・3×8以上(1)………主城原地区
掘立柱塀付（礎・倉・塀）	3×5(7)……………増長天・ハツ波・村上地区
無（礎・倉）	3×5(14)・3×4(10) 主城原・ハツ波・村上・猫坂地区
不明（礎石の確認のみ）	3×5(10)……………尾花地区

合計 3×5 32棟(全て同一規格)  
3×4 11棟(全て同一規格)

図13 大野城の建物

これらを少し分類してみますと、直接地面に柱を建てる掘立柱建物と、礎石の建物とに大きく分かれていますが、さらには周りに柱だけがある側柱の建物、土間のような建物です。この側柱と総柱建物があります。それから礎石は実は側柱の建物が一つもないのです（図13）。大野城の場合には、礎石建物はすべて倉庫です。このように数がだいたい分かっています。大変興味深いのが、三間×五間の礎石の建物が合計で三三棟あります。これの柱の寸法が全部一緒なのです。礎石の大きさもだいたい一緒です。ということは同規格の建物です。同規格の建物というのは、ただ設計が一緒ということではなくて、材料の調達から施工までがすべて一貫して同じようにやれるということです。ですから大変無駄を省いた工法です。プレハブとは少し違うかもしれませんが、規格化をすることで大量に造ることが可能だということです。

正倉院の先ほどの写真を見て想像していただきたいのですが、あれだけの建物の材料の調達、それを建てる労力というのは大変なものです。もちろん三三棟が一時期に建ったわけではないのですが、三×五間の



図14 3×5間総柱高床構造

同規格が三三棟あって、三×四間は少し新しい時期になりますが、これは一一棟ありまして、ほぼ規格はそろっています。同一規格ではありませんが、柱間の寸法、柱と柱の間隔の寸法が少しばらついています。微妙ですが少しです。これに対して三×五間は奈良時代の建物です。統制のとれた律令制そのものを体現しているように狂いがないのです。ところが九世紀になると、少し律令制も緩み始めてくるというのが、こういうところからもわかるわけです。

先ほどの図9をあえて出します。側柱と総柱建物です。今話をした三×五間というのは総柱です。総柱の建物の中でも、よく見ていくと基壇という、基礎の部分をお化粧するクラスの高い建物があるということです。鞠智城にも出てくるのですが、さらに掘立柱と併用の建物もあるということです。同じ三×五間でもこのように少し様相が違うものがあるということです。三×五間で一番多いものがこのイメージ図です（図14）。高床になっており、そこに階段を付けて稲などを倉に納めるというものであると思います。

先ほど幾つか地区があると言いましたが、それぞれの地区ごとに様子を見ていきますと、例えば主城原地区は図の一番上ですが、左の一番古い時期からずっと九世紀まで連綿と続いて、長期間にわたる土地の利用がなされているわけです（図15）。ところがハツ波と増長天は奈良時代の途中から始まるのですが、九世紀

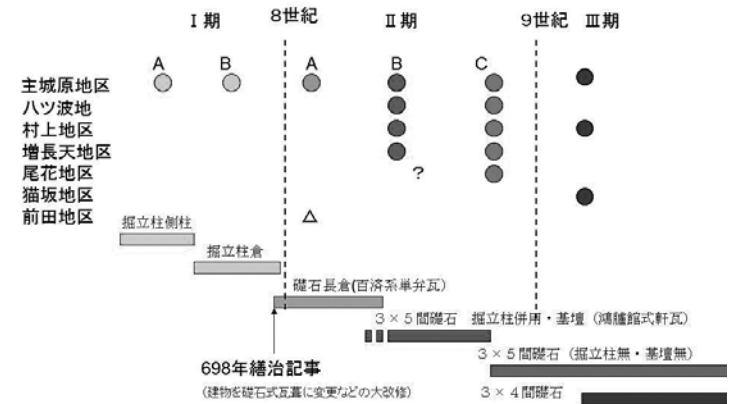


図15 大野城の建物変遷（時期はあくまでも目安）

ていることが分かります。こういうことかというのと、三×五間の倉はすでに建っているわけです。建て替えてるのではなくて、多分この倉はそのまま建っていて、どこかに建てる場所がないかというので、唯一探

には利用されてないのです。あるいは奈良時代の終わりから始まるものと、九世紀になって初めて始まるものがあります。地区によって土地の利用の仕方、始まり方、あるいは終わり方が違うということです。それはどういふことか見ていきます。図16は村上地区というところです。この空白地は小高い山がある部分です。ここでは、最初に狭い丘陵を平坦に造成して、三×五間の周りに掘立の柱が付くという特異な建物ですが、三×五間の倉がまずここに二棟建ち並びます。しかも南北棟であることが大変重要です。さて、九世紀になったときに、今度はどこに建てようかということで、建て増しが計画されているのですが、大変条件の悪い丘陵の裏側に建てられます。現地に行くとき分かりますが、こんなところに建てなくてもいいだろうというところに無理して、三×四間の倉を建て

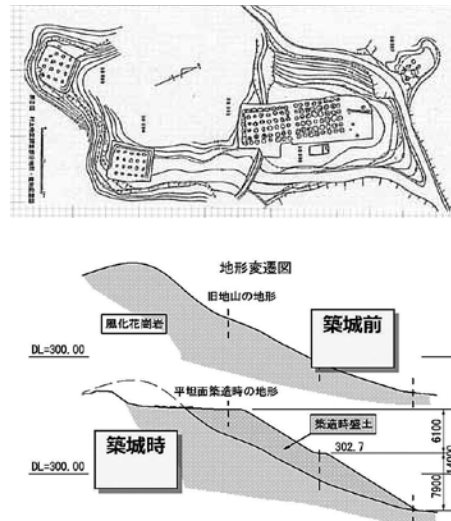


図16 大野城跡・村上地区

段造成をしてから、埋め立てをして平坦地を確保して倉を建てています（図16下）。そこまでして山の上に倉を建てているということが分かりました。

私が考えている倉の変遷です（資料編23頁図3）。I期、II期、III期と記していますが、一番古いものが掘立柱の側柱の建物です。平床の土間構造の建物です。この段階では倉は造営されていません。次の段階で初めて、掘立柱の総柱、要するに高床の掘立柱式の倉が造営されはじめます。七世紀の終わりごろです。そして「I期C」としていますが、初めて礎石式の総柱の建物、三×八間以上、おそらく三×九間、正倉院と同じ規模だと思いますが、そのような倉が突如としてここに建つわけです。重複関係から、これが礎石の中



では一番古いということが分かっています。

ところがこれはそれほど長くはないのですが、その後、礎石式の総柱の倉、三×五間の基壇や掘立柱併用という、先ほど図面で見ましたが、礎石の周りに掘立柱が回っている建物ですが、高品質化というか、普通の倉よりも少し優位性のあるような倉が最初にできてきます。その後に、同じ三×五間で基壇もないのですが、南北棟という、なぜ南北棟かというと、これには意味があります。日照時間など条件がいいのは南北棟なのです。南に扉があると、扉は非常に弱く、風の影響も受けますから、なるべく風の影響を受けない、あるいは日光の影響を受けないのは東側に扉があるものだろうと思っっているわけです。そういう南北棟のものが建ちます。ところが地形の制約から南北棟が建てられなくなると、しょうがないので東西等が建てられます。このときには基壇ありませんし何もありません。九世紀になって、三×四間という規模を縮小したものが建ち始めると覚えておいてください。三×五間が奈良時代になって、九世紀になって三×四間になります。これが大野城の姿です。

この時期区分の私の根拠は、一つは大野城の築城の六六五年であるということです。それから本日お話があると思いますが、鞠智城と同じ修理、繕治をするということがわざわざ記録されているということは大変なことだと認識されていたからだと思います。この時が礎石の大きな建物が造営された時期だろうと考えています。礎石の建物には瓦屋根が一般的ですので、岡田先生の七世紀のお話の中に出てきた単弁の瓦は、多分この礎石建物に葺かれていたのではないかと思います。そして、鴻臚館式の瓦は大宰府政庁と同じような

時期ですので、七二〇年ごろに三×五間が建てられた時の瓦であろうということです。このようにして幾つかの年代的な根拠を基にすると、このような建物変遷になるということです。

## (二) 基肆城の建物

これは基肆城です(写真37)。基肆城にも同じように倉庫があります。これまで発掘調査がされていないので、掘立柱は検出かどうか分からないのですが、礎石は山中にたくさんあるわけです。それを数えていきますと、二三棟が三×五間の建物、調査されていないので分からないのですが、総数を見ますと三五棟ぐら

いになるということです(図17)。

この三五棟は実は大野城と同じ数です。大野城にも三×五間の倉が三五棟、基肆城にも三五棟ということが想定されます。おそらく大宰府によるマスタープランの中で大野城と基肆城という、大宰府のそばにある山城に倉が配置されていたということです。そうい

とが分かります。



写真37 基肆城跡



図17 基肆城跡

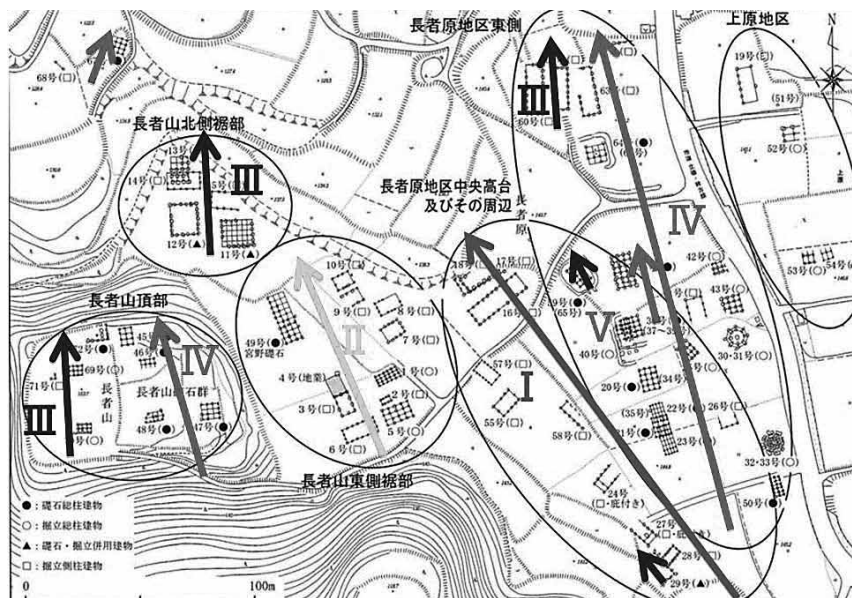


図18 鞠智城跡・建物の主軸方向（矢印は主軸線）



写真38 鞠智城跡・長者原地区

## 二・鞠智城の建物の動向

本日の主題である鞠智城です。鞠智城についても、大野城の変遷と合致するのだろうかということを考えてみたいと思います。これは鞠智城の礎石建物がたくさん出ている風景です（写真38）。私がこれを分類した根拠というのは、発掘調査報告書でV期の区分が既に示されているところですが、報告書というのは、古代史というと、原典となる文字史料ですから、あとは解釈をどうするかということを考えなければいけないわけです。基本的な流れは報告書で示されているのと変わらないのですが、もう少し単純化してみました（資料編25頁図4）。

まず奈良の正倉院に見られるように、建物は簡単に廃絶しないということです。次に、建物配置の計画があるとすれば、そこには必ず基準となる主軸線があるはずで、その主軸線に合わせて、建物は建てられていくのです。これは日本全国の官衙の調査でいたい同様な様相が分かっています。そういうことで一応方位、北に対してどのぐらいの角度をもっているかということで見直していきますと、最初に出てくるI期はこの辺り、ちょうどため池から上がってきたところの一番平坦な、台地の中央に建て始めるといことです（図18）。これは兵舎という解釈もありますが、東西棟ですから、正面は南ですので、かなり質の高い何らかの意味のある中心的な建物だろうと思っています。そういうもの

が鞠智城にまずは出現します。これはご紹介になりましたが、L字型などの配置を見ると、官衙、つまり役所的な配置が見て取れるわけです。これが初めて鞠智城ができたときの姿ではないかと思っています。

II期になりますと、I期の西側のエリアにいろいろなものが建ち始める時期です。このときにI期はまだ存続していると思います。II期の段階で拡張されて、このエリアが開発をされるわけです。このときに側柱の建物もありますが、白丸が掘立柱ですが、掘立柱の高床の倉と合わせて、正倉院や大宰府、基肆城と同じような礎石の三×九間の長倉が南北棟で出るといことの意義は何だろうと思っていますが、同じような傾向があります。

III期というのは奈良時代の前半になるわけです。このときに初めて、ほぼ真北方向、北極星の

方角を向くということです。つまり測量をきちんとするということです。北極星のほうを向いた建物がⅢ期でいろいろなところにあります。恐らくこういいうところにⅢ期の建物が分散して出てきます。つまりⅠ期の建物とⅡ期の建物のさらに外側にⅢ期が造られるというように考えます。奈良時代の初めに、ここにあります。礎石の建物の周りに掘立の柱が回るといふ、大野城にもありました。同じようなものが同じ時期に出てくるのではないかと思います。ここにも一つ、二九号、一一号と一二号という建物が同じ時期に出てくると考えています。

Ⅳ期とⅤ期になると少し増えるのですが、八世紀の末ごろから九世紀にかけて、同じ方向の建物で、あとは少し建て替えが行われたのがⅤ期ではないかと考えています。このとき一番特徴的なのは、東側に拡張されて、このときにⅠ期の建物がどうだったかということとは分らないですが、こちら側に倉のようなものが並び建っているということです。私の考えでは、Ⅰ期のときの中心的な建物は東西棟ですから正面が南で、南向きの立派な建物は、この後もここに建て替えられていますので、ここは非常に重要な場所だという認識を当時の人も持っており、大事にされていたのではないかと思います。東側に拡張されます。このときに倉がずっと並ぶという、先ほどお話がありました。並ぶ建物が出てきます。これはまさしく地方の郡の役所に付属する正倉院、正倉という税の稲を収納するあり方とだいたい似ています。このようなエリアがⅣ期になるわけです。もっと東側のほうに延びていくと、方二町ぐらいの範囲で考えられるのではないかと気がしています。

年代	大野城建物群	鞠智城建物群	特記事項
7C第3	Ⅰ期-古 Ⅰ期-新 Ⅰ期-新	Ⅰ期 Ⅰ期 Ⅰ期	7C第3
8C	Ⅱ期-新 Ⅱ期-新 Ⅱ期-新	Ⅱ期 Ⅱ期 Ⅱ期	8C
9C	Ⅲ期 Ⅲ期 Ⅲ期	Ⅲ期 Ⅲ期 Ⅲ期	9C
10C	Ⅳ期 Ⅳ期 Ⅳ期	Ⅳ期 Ⅳ期 Ⅳ期	10C
11C	Ⅴ期 Ⅴ期 Ⅴ期	Ⅴ期 Ⅴ期 Ⅴ期	11C

図19 大野城・鞠智城建物群対照表

そうなりますと、八角形の建物はどうなるのかということですが。ここは倉庫群というエリアの中にありますので倉の可能性ががあります。ただし高床の倉かどうか解りません。高床の倉は切妻の倉ではありませんので、もちろん八角形の倉ですから、よく文献に出てくる八面の校倉のような、何か非常に特殊なものを納めた倉がここにあったと考えるのが一番分かりやすいというのが私の結論です。

これを大野城と比較してみると、大野城は大宰府、水城、大宰府口城門というものと時期の変遷がだいたい似たような推移をしています(図19)。これに合わせて大野城の編成も考えているわけですが、それと同じように鞠智城も、最初に掘立柱の側柱が出てきます。これは一緒です。七世紀の終わりに単弁の瓦が葺かれたものは、礎石の大型の倉庫、長倉だろうと考えています。これがまさしく「繕治」といふ、六九八年に相当するのではないかと思います。その後違うのは、大野城、基肆城では三×五間ですが、鞠智城では三×四間です。礎石の周囲に掘立柱をめぐらせた、礎石・掘立柱併用の建物、これは後で紹介しますが、こうした特殊な



写真41 高安城跡・高床倉庫の礎石



写真40 大野城跡・増長天地区  
掘立柱併用礎石建物

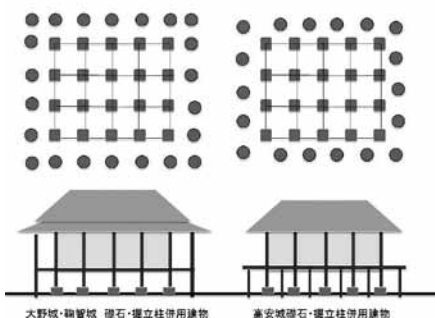


図21 掘立柱併用礎石建物

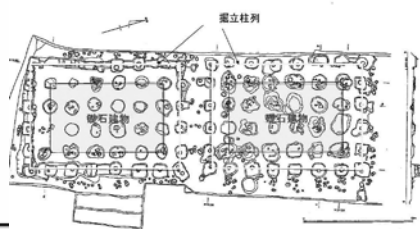


図20 大野城跡・村上地区礎石群

ところに穴があり、これが掘立柱です。これはどういう構造なのか。私はかつて論文で、これは塀であると考えました。封をするために塀をしたのだと考えています。倉は米を入れて満倉になると封をするわけですから、あとは建て増していくしかないわけです。不動倉、動かさなということを不動といいます。これが大野城でできた掘立柱列が周りにある図面です（図20）。同じ規模で柱筋をそろえてきれいに並んでいます。これは高安城の倉ですが、ここにも実は、周りに掘立の柱が建っているものがあるということです（写真41）。

こういうことになるかというと、これは想像図です（図21）。大野城、鞠智城



写真39 鞠智城跡・八角形建物

ものが大野城と鞠智城、高安城にもあります。金田城は分かりづらいですがあります。

その後三×四間が少し間をおいて多分続いていくと思うのですが、土器の空白期もありますので、ここはないかもしれません。そのままの可能性がありますが、九世紀になって三×四間が出てきます。この柱の寸法が、大野城の三×四間の柱の寸法とぴったり一緒です。要するに八世紀の終わりから九世紀ごろに、一つここに画期があつて、三×四間を再度建て直すという時期があります。

この八角形の建物は何か分かりません（写真39）。武器を入れたかもしれませんが、こういうものがこの時期に、掘立の八角形が出てくるということです。その後建て替える礎石の総柱が出て

くるということです。基本的な流れは大野城とほぼ同じような動きをしているのではないかと見ているわけです。細かく違うところを探せばたくさんあるわけです。とにかく鞠智城の場合は、建物の規模、構造がかなりバラエティーに富んでいます。大野城はどちらかというとあまり面白くないです。教科書にびたつと沿うような建物ばかりですが、少しバラエティーもあるということです、違いはあると思います。

これは掘立柱併用建物といっているものです（写真40）。三×五間の礎石の周りに柱筋をそろえるような

の場合には、屋根からさらにもう一つの屋根が出るような、こういう構造が一つ考えられます。ところが高安城の場合は少し違います。柱の位置が一つずつずれていきます。真ん中に掘立柱がきています。ということは、これはもしかすると縁側のようなものが臨時的にあつたのかもしれないがよく分かりません。もう一つの案として、大屋根がこれにもう一つあつたのではないかとこの案もあるようです。いずれにしてもこのような礎石の周りに掘立柱があるというのは、今のところ古代山城だけです。平城京にもいろいろな掘立柱併用の建物がありますが、身舎に掘立柱を用いるので性格が異なります。

### 三・鞠智城の倉庫群の形成

このような倉というものが、古代山城の中にたくさん建てられているということです。鞠智城の場合に「菊池城院」、後で出てきますが「院」ということです。当然郡衙の正倉のように一院を構成していたことは間違いありません。これは九世紀ですから。そうなりますと、私が言ったⅣ期からⅤ期のころでは方二町のようなものが想定されますので、そういう「院」があつたのではないかと考えています。

倉のあり方というのが、郡衙正倉の場合には整然と並びます。この近くでは御殿前遺跡というものが、東京大学の先の北区の飛鳥山の手前に、かつての大蔵省の造幣局がありましたが、そこに郡衙、郡の役所の倉が建ち並んでいました。その倉の様子は北区の飛鳥山博物館の中に原寸大の模型がありますので、ぜひ見てください。これは参考になります。倉にどのようにして稲穀を運び入れるかという模型が展示してあります。

そういう郡の役所に貯め込まれた非常用の米の倉庫のあり方と非常によく似ているということがいえるのではないかと思います。特に大きく長い倉、長倉と呼ばれているものが一つ象徴的にあるということも、郡衙の正倉と大変よく似ています。そういう点では何ら変わりはないといってもいいのではないかと思います。

### 四・倉庫形成の目的

目的は何のためかということです。よく分かりませんが、もちろん山の中に貯蔵するわけですから、単に非常用のためであれば平地でいいのです。山の中に貯め込む、しかも古代山城の中に置くことは対外的なことがあるのは当然ですが、郡衙正倉のあり方に似ているという点では、もう少し地域支配という観点も重要だと思います。私はこういう倉庫は奈良の大仏ではないかと思っています。みんなを助けてくれる、そういう精神的な支えにかわるもののような気もするのです。そういうものが九州のいろいろなところ、特に古代山城の中にも置かれていたという点では、対外的なものもありますが、内政的な比重というものが強かったのではないというのが私の結論です。

時間も来ましたのでこれで終わります。ありがとうございました。